Washington Japanese Language School 2024

ワシントン日本語学校（補習授業校）だより

令和７年２月８日発行　第35号

はなみずき

ワシントン日本語学校事務局
HOT LINE (301)962-7415
Phone (301)962-7410
FAX (301)962-7411

mail:wjls@wjls.org　http://www.wjls.org/

逃避脳

校長　三原　洋一

「１月は行く、２月は逃げる、３月は去る」という言葉があるように、新年が明けたと思ったら、あっという間に２月を迎えました。本年度の授業日も残り６日となり、時間の流れがより一層速く感じられる時期です。

子どもたちにとっても、学年のまとめをする大切な時期となります。一人ひとりがこれまでの学びを振り返り、次の学年への準備を進めていけるよう、学校全体でしっかりと支えていきたいと思います。また、寒さが続く中でも、健康に気をつけながら元気に過ごせるよう、ご家庭と連携しながら見守ってまいります。

さて、以前読んだ本の中に、「人間の脳は、自分にとってプラスかマイナスか、好きか嫌いかで、物事を判断する」ということが書かれていました。つまり、自分にとって「これは良い」とか「プラスになるかもしれない」と判断された情報は、記憶に残るのだそうです。

一方で、マイナスの情報（子どもにとってのマイナス情報とは、否定的な言葉、指示や命令ばかりの言葉です）に対しては、たとえ相手が正しいことを言っていたとしても、脳はストレスやプレッシャーを感じ、「嫌な情報」と判断して、その言葉を受け流してしまうのだそうです。人間には自己防衛本能が備わっており、命の危険から日常生活のストレス、不安に至るまで、「自分を守るべき状況」に直面するとこの機能が働きます。

この状態が慢性化すると、次第に人の話を真剣に聞けなくなってしまうのだそうです。このような「困難から逃げてしまう脳」を「逃避脳」と呼ぶそうですが、困

ったことに、この脳を守ろうとする自己保存の反応は、特にまだ脳が成長過程にある子どもに出やすいということです。

　もちろん、大人が必要なタイミングで叱ることは大切です。私たち教職員も、児童生徒に対して、いじめや人権に関わること、命に関わることについては、厳しく指導を行います。

　しかし、普段何かを伝えようとする時に、つい「本当にわかったの？何度言ったら分かるの！」などとマイナスな言葉を投げかけてしまうことはないでしょうか？時に「叱る」という行為にかこつけて、自分の思い通りに子どもを動かせないことの苛立ちを子どもにぶつけていることはないでしょうか。

　子どもに「できていない」や「なっていない」ことを指摘するのは、「親の役目」「家庭教育」であることは間違いありません。しかし、子どもにとっては「嫌なこと」「言われたくないこと」であることが多いようです。

　いつもお話しているように、「良さを見つけて褒めて伸ばす」ことは大切です。褒められることで、子どもたちは成長していきます。やはり、私たち大人は、子どもに「プラスの言葉」を多くかけることを心がけたいものです。

幼稚部年中組節分行事

　先週、ひまわり組とすみれ組が合同で、節分の行事として豆まきを行いました。

　今年は、それまでに節分の話を聞いたり、鬼のでんでん太鼓を作ったりして準備を進めてきました。また、それぞれのクラスでは、先月から「鬼のパンツ」や「まめまき」の歌を歌ったり、「ないたあかおに」の紙芝居を読み聞かせたりしてきました。

　当日は、子どもたちが元気いっぱいに「鬼は外！福はうち！」とかけ声をかけながら、鬼に扮した教員に、新聞紙を丸めた豆を投げました。「みんなが健康で幸せに過ごせますように」という願いを込めて、邪気を祓う伝統的な豆まきの行事を楽しく体験することができました。